

風七題

小川未明

青空文庫

一

子どもは、つくえにむかつて、勉強べんきやうをしていました。秋あきのうすぐらい日ひでした。柱は時計しらいけいは、カッタ、コット、カッタ、コットと、たゆまず時ときをきぎんでいましたが、聞きなれているので、かくべつ耳みみにつきません。それより、高たかまどの、やぶれしようじが、風のふくたびに、かなしそうな歌うたをうたうので、子どもは、じつと耳みみをすますのでした。風かぜはときには、沖おきをとおる汽船きせんの笛ふえとも、調子ちやうしを合あわせましたし、また、空そらに上あがるたこのうなりとも、調子ちやうしを合あわせました。

子どもは、これを聞いて、よろこんだり、うれしがったり、もの思おもいにふけつたりして、勉強べんきやうをわすれることがありました。

子どもには、さまざまな、風かぜの歌うたが、わかるのでした。

二

東京から、兄さんが、帰ってくるというので、子どもは、停車場へ、むかえに
でました。

一人、さくにもたれて、汽車のつくのをまっっていると、そばに、きれいな女の人が、か
ばんをさげて立つていました。

そよ風が、その人の、長いもとをかえし、ほつれ毛をふいて、いいにおいをおくりま
した。子どもは、やさしいすがたが、したわしくなりました。

そのうち、汽車がつくと、女の人は乗りました。けれども、兄さんは、帰ってきません
でした。

子どもは、かなしみをこらえて、田んぼの細道を、わが家の方へもどりました。

青田の上を、わたる風が、光の波をつくり、さっきの、きれいな人のまぼろしがうかぶ
と思うと、はかなく、きえてしまいました。

子どもは、口笛をならしました。

三人の子どもたちが、広い空き地で、遊んでいました。そこには、くるみの木、くりの木、かきの木、ぐみの木などが、しげっていました。

一人が、くるみの木へのぼって、ハーモニカをふきました。一人は、くりの木の下の竹ざおをもって、かぶと虫をとっていました。もう一人は、ぐみの木のえだをわけて、熟した実をさがしていました。

このとき、ゴウツと音をたて、風が、おそいました。すると、とんぼが、うすい羽をきらめかしながら、ふきとばされてきました。

「やんまだぞう。」と、さおをもった、子どもが、さけびました。

空は、みどり色に晴れて、太陽は、みごとにさいた花のごとく、さんらんとかがやきました。

また、ひとしきり、風がわたりました。そのたびに、木々のえだが、波のごとくゆれて、ハーモニカの音も、きえたり聞こえたりしました。

四

夏の晩方のこと、いなか町を、馬にから車をひかせて、ほおかむりをした馬子たちが、それへ乗つて、たばこをすつたり、うたをうたつたりしながら、いく台となくつづきました。

ガラツ、ガラツと、そのわだちのあとが、だんだん、遠ざかった時分、こんどは、ドンコ、ドンコと、たいこをたたいて、町の中を、旅芸人をのせた、人力車が、列をつくつて、顔見世に、まわりました。

あかね色をした、夕空には、火の見やぐらが、たつていました。そのいただきに、ついているブリキの旗が、風の方向へ、まわるたびに、音をたてました。

湯屋から、手ぬぐいをぶらさげて、出てきた、おじいさんが、上をおおいで、「ああ、北風か、あすもお天気だな。」と、ひとりごとをしました。

また、往来では、子どもたちの、たのしそうにあそんでいるわめき声がしていました。

五

すこしの風もなく、木の葉も、じつとしてうごかず、まるで湯の中にひたつたような、

むしあつい晩ばんでありました。みんな、うちにいられぬとみえて、外そとで話はなし声こゑがしました。わたしも出でてみると、みんなが、あちらのすずみ台だいへあつまつて、うちわをつかっています。

わたしも、そこへいつて、こしかけました。だんだん、夜よがふけると、どことなくしめつぽく、ひえびえとしてきました。畑はたけでは、つゆをしたつて、うまおいが、ないていました。

「どれ、だいぶすずしくなったから、はいつてねましようか。」と、一人ひとり、立ちたました。「みなさん、おやすみなさい。」と、また、一人ひとり立ちたました。

このとき、あちらの、黒くろい森もりの頭あたまへ、ほんのりと白しろく、乳ちちをながしたように、天あまの川がわが見みえました。

六

昼ひるごろから、ふきはじめた風かぜは、だんだん、暮くれがたへかけて、大おおきくなりました。「いよいよ、台風たいふうが、やってきたかな。」

「なんだか、頭のおもひ日ですな。」

道をいく人の、こんな話し声が、耳へはいりました。

ぼくは、おとなりの正ちゃんふたりと二人で、カチ、カチと、ひょうし木ぎをたたいて、近所きんじよを、火の用心ようじんにまわりました。

もう、日がくれたのだけれど、ふしぎに、空そらは明るくて、けわしい雲くもゆきが、手にとるてように、見えしました。

「この風かぜは、南洋なんようから、ふいてきたんだね。」と、ぼくが、いうと、正ちゃんしょうちゃんは、立ちどまって、空そらをながめ、

「死んだ兄にいさんが、あの雲くもに乗のつてこないかなあ。」と、いいました。

風かぜは、間あいだをおいて、ふきました。なまあたたかく、しめつぽくて、ちようど、大きな海うみのため息いきのようでありました。

七

子どもは、床とこの中なかで、ふと目をさましました。すると、外そとでは、こがらしがふいていま

した。

その、風の音のたえまに、遠くの方で、犬のほえるのが聞こえました。

「どこで、ないているのだらう。」と、子どもは、耳をすましていました。そのうちに、ねむって、ゆめを見たのであります。自分は、犬の声をたよりに、広い野原を歩いていました。月の光は、真昼のように、くまなくてらしていました。犬の声は、野原のはての村から、聞こえるのでした。

やがて、あかりが、ちら、ちら、見えたので、そこまで、たどりつくど、まだ一軒、ねずにおきている家がありました。自分は、まどへせのびをして、ガラス戸のうちをのぞくと、お母さんらしい人が、病気でねていました。そのまくらもとへ、小さな女の子がすわって、看病をしていました。

「ああ、感心なことだ。」と、思つて、自分は、なにかいおうとして、あせると、目がさめてしまいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「子どもの村」

1948（昭和23）年7月

※表題は底本では、「風《かぜ》七一題《だい》」となっています。

※初出時の表題は「風と子ども」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風七題

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>